

## WGの開催状況

第1回会合(平成21年10月15日)

・構成員からのプレゼンテーション(出席者全員)及びディスカッション

第2回会合(平成21年11月5日)

・アンケート結果やこれまでのプレゼンテーション等を踏まえディスカッション

## 主な議論

【ニーズ・デマンドからの課題抽出】

○社会的ニーズは、政策的にトップダウンで設定するべきものではないか。

○研究者だけでなく様々なステークホルダーが加わって社会的ニーズを議論すべきではないか。

○社会的ニーズを設定する際に、市場性の担保が課題ではないか。

○社会問題解決には、既存の技術で短期的に対応が可能なものと、長期的に技術開発が必要なものとの両方を考慮する必要があるのではないか。

○研究開発の事後評価が、(社会的ニーズの充足という観点ではなく)技術的な達成度の評価のみに限定されている傾向があるのではないか。

○長期的な研究開発課題については、どのような目標を設定して継続性を持った評価を行っていくかが課題ではないか。

# 推進戦略WGの検討状況

## 主な議論(続き)

### 【オープンイノベーション、国際競争力強化】

- オープンイノベーションはあくまで手段であり、それにより何を狙うかの目標を明確にする必要があるのではないか。特に、最初からグローバル市場を見据え、標準化まで含めて連携を考えることが重要ではないか。
- 他者と連携するには、自前で強い技術を持っていることが大前提。自社技術の強みについてのアセスメントも必要ではないか。
- 産官学が連携してフォーラムを作るなどは有効であるが、入りやすく抜けやすい場を作ることが重要ではないか。
- 海外のプログラムとハイレベルで連携するような形も有効ではないか。
- 国内外から様々なアイデアを集め、技術レベルを向上させる仕組みとして、コンペやコンテストも有効ではないか。テストベッドもうまく活用できるのではないか。
- 海外との連携を研究資金獲得の条件とすることも一案ではないか。

### 【人財確保、育成】

- 日本人にこだわる必要はないが、日本の大学が日本の企業に優秀な人財を供給できるような仕組みが必要でないか。
- ニーズと技術を橋渡しする人財が欠けているのではないか。そのような人財に求められる条件を明確にし、教育現場等での工夫をすることが必要ではないか。
- そのような人財を企業でも優遇する仕組みが必要ではないか。また、組織間での人的交流、流動化がなければ活躍できないのではないか。
- 米国のプログラムダイレクタ制度のように、大きな権限と責任を持って研究開発プロジェクトをリードするような仕組みが、研究者のキャリアアップにおいて有効なのではないか。